

茂吉の観音さま-歌人 永井ふさ子

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2009-04-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 玉井, 崇夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/3582

茂吉の観音さま

—— 歌人 永井ふさ子 ——

玉 井 崇 夫

今では誰も知っていることだが、齊藤茂吉が五十二で出会った秘密の恋人に、永井ふさ子がいる。ふさ子はこのとき二十五、伊予松山の人である。綺麗な人だ。茂吉は「四国なるをとめ恋しも」と歌っている。永井家は松山藩の御殿医の家系につながり、また正岡子規とも縁戚にある。ふさ子の父は愛媛県立病院の院長を務めるかわら、市内に医院をも開業していた。県下の名士だ。

ふさ子が茂吉からもらった恋文を多少の経緯を書き添えて刊行した『齊藤茂吉・愛の手紙によせて』（求龍堂、昭和五十六年）がある。昭和九年十一月から昭和二十年五月まで、封書と葉書をあわせて百五十七通。吃驚するくらい、茂吉の文面はあけすけである。

「ああ恋しくてもう駄目です。しかし老境は静寂を要求します。忍辱と恋とめちゃくちゃです。」「ふさ子さんの小さい写真を出してはしまひ、又出しては見て、為事してゐます。今ごろはふさ子さんは寝ていらっしやるか。あのかほを布団の中に半分かくして、目をつぶって、かすかな息をたててなどとおもふと、恋しくて恋しくて、飛んでも行きたいやうです。ああ恋しいひと、にくらしい人。」「ふさ子さん！ふさ子さんはなぜこんなにいる女性なのですか。何ともいへない、いい女性なのですか。」「銀座などでどんなひとにあひましても体に変化は起こらないのに、御手紙の一行でもよんでゐるうちに体に変化が起こつてまゐります。体の変化といふのは御分かり

でせう。とても清纯にうるほふ尊いものです。」「御手紙
いたゞきました。廁上でいだくやうにしてよみました。
一昨日午睡してゐますと、桃割か島田かそんな日本髪ゆ
つたあなたがぼくの小さい乳を吸ふのです。そんなこと
してはいけない、いゝえかまはないの、いけない、かま
はない、くすぐりたい、にくらしい、それで目がさめまし
た。』

二人の秘密の文通は、途切れながらも十年ばかり続い
ているが、茂吉が好んで使う「交合」のあつたのは、昭
和十一、十二年ころの二、三年間だったようだ。たった
これだけの思い出で、ふさ子は独り身を通すことになる。
それで女の生涯は悔いのないものなのか。それぼっちの
青春の熱い日が、それ以後の六十年を支え得たものなの
か。男のぼくは驚くのだ。

実は、永井ふさ子さんは、ぼくの出た県立松山南高等
学校の前身松山高等女学校の卒業生で、ぼくから見れば、
親の世代かそのちょっと上くらい先の先輩になる。平成五
年、八十三歳で亡くなられたが、それまで長く伊豆の伊
東で暮しておられた。その頃、ぼくは同窓会関東支部の
世話役をおおせつかったいたので、お目にかかる機会も
あろうかと心当てにしていた。しかし、こちらの勝手な

思い込みである。先方にとっては迷惑な話かもしれない
と臆しているうちに、亡くなられてしまった。会えると
きに会っておかないと、後悔が残るばかりだ。

ふさ子が茂吉に初めて会つたのは、昭和九年、向島百
花園で催された正岡子規の三十三回忌歌会だった。ふさ
子が父親から聞き知っていた子規の思い出話を二つ三つ
したところ、

「ほう、それは因縁深いな。」

と、茂吉はいったという。

茂吉の子規に対する敬愛は大変なもので、子規の悪口
を聞かされ帰ってきて夜中に下痢をしたほどの男だから、
その縁戚にある美貌の娘と知って、不思議な縁を覚えた
のはよく判る。しかし、そこには自分に対する疼くよう
な劣等感にも似た悲しさがあったのだらうと思うのだ。
勿論、新聞沙汰になった妻輝子のスキャンダル(ダンス
ホール事件)によって、茂吉自らいうところの「精神的
負傷」の真っ最中だったこともある。この時分、茂吉は
自分の墓を造って戒名まで考えているくらいなので、自
分の来し方をしきりに顧みていたはずである。

山形の上山金瓶の百姓の三男坊に生まれ、村一番の学



業成績を見込まれ、医者の斎藤家に養子に迎えられた男である。十四で父に連れられて、八十八キロの道を歩いて出羽山脈の関山峠を越え、広瀬川を渡り、仙台から汽車で半日かかって東京へ出てきた。仙台の宿で初めて食べたモナカの味に感激し、東京の第一印象を「世の中にこんなに明るい夜が実際にあるものだろうかとおもった。」と書いている。そんなぼっと出の田舎者が辿った人人生行路が、蔵王のお山を振りかえり振りかえりしてトボトボ歩いた道中と比べても容易であったはずはない。人前でペロリと舌を出すのは、茂吉の死ぬまで抜けなかった奇癖だったが、これについて少年時代のコンプレックスを説いた考察があって面白いが、そんなものかもしれないとぼくは頷けるのだ。十四、五歳といえ、男の子だけでつるんで遊びたい盛りで、茂吉は赤ん坊の輝子をおんぶして遊びに来るので、仲間がみんな嫌がったと、これも誰かが書いている。「それは何だ、誰だ。」と問うと、茂吉は「僕の未来のワイフだ。」とすまして答えたというのだが、ぼっと出の茂吉にだって、東京の腕白どもに取り囲まれていれば、男子の沽券があったろうに。

茂吉は、正岡子規の名前を屈託なく口にする娘の顔を見て、「ほう、それは因縁が深いな。」と漏らしたという

が、我が身は家付きの幼な妻を一生おぶって、己の才覚だけで身を処し生きざるを得なかった、そんな歪な自分と比較し、ふさ子がすっと立って貴く見えたのだ。そこには、劣等感の裏返しである憧憬があったのだろう。ふさ子もそんな茂吉の心の事情を十分承知していて、この人は偉い人だが、かわいそうな人なのだという思いが、つまり *div is akin to love* になっていたのではないか。恋愛の均衡というとおかしな言い方だが、負い目ばかりでは、六十年も自分を支えていけるものではないと、ぼくは思うのだ。かわいそうな人だという心情によって、ふさ子は茂吉を越えたのか。

茂吉がふさ子を思って、さかんに松山へ恋文を送っていた頃の随筆に、『三筋町界限』がある（『文藝春秋』昭和十二年一月号）。茂吉には、歌人として以上に散文家として偏愛を持つ愛読家がいる。『三筋町界限』は名作である。山形上山から東京へ出てきた時分の「春機発動期」をしみじみと回想し、名妓ぼん太を偲んでいる。

「昭和十年になって、ふとぼん太のことを思いだし、それからそれと手を廻して友人の骨折によってぼん太の墓のあるところをつきとめた」「昭和十一年の秋の彼岸に私は多摩墓地に行った。雨のしきりに降る日で事務所

で調べるのに手間どったがついにたずね当てることが出来た」『ぼん太については、森鷗外の『百物語』に出て
いるが……誰か小説の大家が、晩年における糸津さんの
生活のデタイルスを叙写してくれるなら、必ず光かがや
くところのある女性になるだろうと私は今でもおもって
いる」と書いている。ぼくはここにふさ子の姿を思い重
ねて読まずにはおられないのだ。

茂吉はぼん太の生き方をふさ子に求め、それを暗に言
いもし、はっきり聞かせもしていたのではないか。それ
がいわゆるマインド・コントロールとなつて、ふさ子の
生涯の心を決定させたようなところがあるのではないか。
ふさ子の方にも、「茂吉ほどの人に愛された以上、外の
人の愛を受け入れられない」という良家の令嬢らしい矜
持があつたのだらう。茂吉は手紙に、「ふさ子さんは余
り言葉が少く、全体でも実に僅かの会話ではなかつたの
でありませんか」「御言葉では余りお仰らないから」と、
ふさ子の寡黙を評している。

昭和十二年十一月、ふさ子は両親の勧める結婚の支度
のために、婚約者と連れだつて、東京へ出てきた。茂吉
と最後の逢瀬になるのかと思うと、ふさ子は急に東京を

離れがたくなり、婚約者を先に返し、一日延ばしにとう
とう年を越してしまふ。別離の予感に、ふさ子の心は大
きく揺れたのだらう。当然、未婚の娘らしい夢の可能性
も、胸に膨らませたのにちがいない。茂吉は戸惑うくら
いだったのか。茂吉は、我が身の老いも感じ、自らいう
ところのゲメインシャフト（共同社会）の重みも感じ、
人生の旅路で出会つたこの「四国なるをとめ」のいちず
さに、美しい火花を見たのだらう。二人は頻繁に会い、
初めて伊香保に一泊旅行もした。だが結局、ふさ子は茂
吉への恋情を断ち切ると同時に、婚約も解消すること
で、自分の心に決着をつけて、東京を去るのだが、それでも
これからの自分の生涯には、もうこれ以上に人を愛する
ことはなかるうと思うと、「西に向かう汽車の中で、窓
に顔をおしつけていたが、涙があとからあとから流れて、
窓ガラスが曇るのを、前の座席にいた老婦人が見かねて、
そっと窓を拭いてくれた」と、ふさ子は書いている。

ふさ子は、茂吉と別れたのち、伊豆の伊東に母と来て、
住んでいる。茂吉の住む東京に遠からず近からずの距離
だったわけである。もう忘れた他人の顔をして、短歌を
詠むことも止め、本箱にいっぱい詰まった茂吉の本も捨
て、ひっそり暮らしていたようだ。茂吉が昭和二十八年

に、母が昭和四十年に死んだあと、そのまま異郷で暮らし、亡くなっている。松山へは帰りづらかったのだろう。伊豆の伊東といえは、瀬戸内海の生国と同じ海の匂いのする土地である。

そうかもしれないと、ぼくは思うのだ。

ふさ子は、「先生と別離の当座は、何をみても涙の出る日々がつづいた。食事をしながらも、道を歩きながらも涙を落としていた。……ながい歳月がようやく心のいたみを癒やしてくれたけれど、歳月と共に父母への悲傷のおもいは深まっていった。」と書いている。事実、父親は娘の不行跡を知って、一年後に亡くなっている。結局は、ふさ子の心の中に、男の面影が薄れていっても、消えず残ったのは父母の悲しい顔であったということなのだろう。ふさ子は生前に自分だけの小さな墓を松山の菩提寺に造っている。永井家の墓が離れて見える位置に建てた心が、ふさ子のせめてもの親不幸の償いだったのだろうか。

ぼくがそうかもしれないと言ったのは、もうひとつ、二十二で死んだばかりの伯母のことを思い浮かべたからだった。伯母は、ふさ子と同じ明治四十二年生れで、松山高女ではふさ子の一年後輩になる。一年遅れたのは、伯母

は尋常小学校からすぐ上がらず、高等小学校に一年在学したからである。伯母の、つまりはぼくの家は、松山から八キロ離れた南伊予の山裾にへばりつく百姓である。

当時は、二年の高等小学校に上がるのさえ、おまじないほどに考えられていたので、女の子なら他に習うことも色々あろうにという空気だった。村の農業組合の専務だった祖父が多少進取の気風のある人で、校長先生から「これからは女子も教育が大事になるから、頑張って県女を受けようみな。」と三人名指しで勧められたのを承知して受けさせたら、伯母だけが合格したらしいのだ。五年間、伯母は南伊予の山裾から城下まで往復四里の道を歩いて通った。卒業後、村一番の秀才だった師範出の男の家に見込まれて嫁ぎ、二人めの女兒を産んで間なしに二十二で亡くなっている。県女も師範も村一番というなんとも狭い世界で、伯母は短い生涯を終えた。——こんな自慢にもならない私事を書き散らして恥ずかしいが、ぼくは子供の頃に母を失っているので、写真でしか見たことのない伯母にも、かねがね母に対するのと同じあわれみを感じていた。ふさ子は銀幕の美女リリアン・ギッシュに似ていると、下級生達からも憧れ噂されていたらしいので、ふさ子は伯母を知らなくとも、伯母の方はふさ子

を見知っていたのではなからうかと、そんなことも永井ふさ子に会えば話してみようと思っていたのだった。

茂吉が上句を作って、ふさ子が下句を付けた合作の歌がある。

光放つ神に守られもろともに あはれひとつの息を
息づく

最初は「相寄りし身はうたがはなくに」と詠んだところ、弱いといわれて作りなおし、「あはれひとつの息を息づく」としたら、今度はいい、人麿以上だ、と茂吉はたいそう喜んだそうだ。

ふさ子と茂吉はもろともに息づいたのだろうが、「ひとつの息」といっても、その音や色が互いに違っていたように思うのだ。茂吉は恋の最中にも好物の鰻を盛んに食っているが、ふさ子は何を食べていたのか。つまり、恋愛という形而上を支えた現実である。ふさ子は松山の人。矢継ぎ早に届く恋文にやるせなくなつて、焦がれて東京へ会いにやってくるのだ。茂吉は鰻など食って待っている。二十七年も年上の、舌をペロペロ出す奇癖のあるオッサンなどに、ふさ子はどんな色の現実を夢みたのだろうか。ふさ子の六十年の長い「余生」は、『愛の手紙に

よせて』に綴つたような美しく哀しい「おとき話」ばかりではなかつたらうと思うのだ。

ふさ子は茂吉の死をテレビで初めて知つたと書いている。

「フーちゃん、フーちゃん。早よう来とうみ。茂吉先生が亡くなられた言うとるよ。」

母に呼ばれて、駆け寄ってくるふさ子の姿を、ぼくは思い描くのだ。

が、本当だろうかと、ぼくは疑つてもみるのである。山形へ疎開した茂吉に宛て、「御住所しれないと心細うございますから、おかはりの折りはおしらせ願ひます。」と書いたふさ子が、他所ながらいつも茂吉の消息に耳を傾けていなかったとは、とても思えない。ひっそりと身を隠して生きる女の姿として少し出来過ぎている気がする。武士が男の意地で腹を切つたように、自己の美化形成と完結のために相当の意地が貫かれていたのではないか。なんだか浮き世離れた、狂気めいた精神を覗き見るようであるが、そんな自虐の生き方も女の原始の生理にはあるのかもしれないと思うと、男のぼくは暗澹となるのだ。

ところで、四国の山裾で短い生涯を閉じた伯母を持つ

ぼくは、最初、ふさ子はお嬢さんで、結局は人が好すぎたのだと見ていた。もっと正直いえば、男の腹の中で、どこか悔る気持も多少あった。本当に茂吉が忘れられないのなら、茂吉に覚悟させるか、せめて今後の身の処し方を決めさせればよい。諦めるならば、ドライに心機一転をはかるしかない、ぼくの合理は考えたものだ。人の好いのもいい加減にせよと、ぼくがふさ子の兄貴ならば、頼ったの一つもひっぱりたいかもしれない。しかし、晩年、郷土の歌人で茂吉の研究者でもある山上次郎氏に、ふさ子は「この齢になって考えてみると、ぎりぎりの時に茂吉が取った態度が判るような気がする。」と静かにこう語っている。

「茂吉から受けた愛のよろこびは一瞬のように短かったのに反して、その後の堪えがたかった苦悩を思うと、よくぞ生きのびてきたと思う。……私の運命であったと思う。然しそれにしても、今になお残念でならないことは、自分の娘心の純粹さが遂に判って貰えず逆に疑われたことであった。茂吉という人は潜在的に、つねに女性不信の心を持ち続けた人であった。その点、御気の毒であった。」（『齊藤茂吉の生涯』文藝春秋、昭和四十九年）
天下の齊藤茂吉が御気の毒であった。それを聞いて、

ぼくの心はしーんとする。そこまでお前は大馬鹿かと怒鳴ってやりたい気持ちの中に、ふさ子が観音さまのように輝いて見えてくるのだ。自分を捨てて死んだ男でも、あれはかわいいそうなんだからと、心底から泣いていてくれる女が、観音さまでなくて、何んであろうか。

わが色慾いまだ微かに残るころ渋谷の駅にさしかかりたり

これは茂吉が亡くなる二年前に詠んだ歌（『つきかげ』所収）である。渋谷の駅は、ふさ子が親を騙くらかし、婚約者を欺き、茂吉に会いに来るたびに寄宿していたアパートの最寄り駅。二人がいつも待合せた場所だ。

好くも悪くもそんな風に自分を思っ、今も見守ってくれている「ぼん太」がいると、老残の茂吉が詠んだ歌ではないのか。そうに違いない。「ふさ子さんは観音菩薩の化身ではなかつたかとおもふことがあります」と、茂吉はちゃんと手紙に書いているのだ。

五十過ぎて燃やした遠い恋の思い出に、まるで末期の光が差すようではないか。